

「誹諧」連歌のかなづかい

かなづかいにおける「正風」と「誹諧」と

今野 真二

キー・ワード 荒木田守武 かなづかいのゆれ 誹諧連歌 字音語 正風連歌

要旨

荒木田守武筆本六種を対象としてそのかなづかいの実態を調査した結果、それらに見受けられるかなづかいは「假名文字遣」のかなづかいにきわめてちがひものであるとの結果を得た。ところで、荒木田守武のかなづかいは総体としてみた場合、かなりな程度統一であるにも関わらず、少数例かなづかひの「揺れ」が見られる。ここでは正風連歌である「秋津洲千句」と「誹諧」の連歌である「誹諧之連歌（守武独吟千句）」をとりあげ、そのかなづかひを比較しながら、かなづかひの「揺れ」について考察を試みた。

一 はじめに

稿者はこれまでに、荒木田守武筆本六種（自筆本四種ならびに守武による転写本二種）を対象として、そのかなづかひの調査を行い、それらに看取されるかなづかひが、「假名文字遣」のかなづかひにきわめてちがひ（一致率が九八・二%）ものであるという結果を得ている。（注一）荒木田守武のかなづかひが「假名文字遣」のかなづかひにきわめてちがひ「傾向」をもつということがら自体は、室町期に書写された連歌書を資料と

してこれまでに稿者が行ってきたかなづかひの調査から得た結果につながるものであるが、その結果の意味するところはさらなる検討を加えて慎重に明らかにしていくべきであろう。

また荒木田守武のかなづかひを全体的に捉えた場合に、かなりな程度統一であることがわかつている。前述六文献の総体でみられるかなづかひの「揺れ」は異なり語数六九五語中で十五語（二・一六%）、延べ語数五一五七語中七三語で、一・四二%にすぎない。これは二種の転写本を含んでの数値であり、かなづかひの「揺れ」が転写本に起因すると予測される例を除くと、異なり語数での「揺れ」は一・四五%、延べ語数では一・一一%ということになり、これらの数値は守武が（結果的に）きわめて「統一的な」かなづかひを行っていたことを示している。ところでかなづかひの分析は資料とした当該文献の「傾向」を捕捉するという、いわば巨視的な視点から行われることが多いが、一方「揺れ」の分析という、いわば微視的な視点からのかなづかひ分析をも行う必要がある。かなづかひの分析をかなづかひそのものの研究に限定した場合、第一義的に求められるのは「傾向」の捕捉とその累積ということになるが、さらにひろく語の表記に目を向け、表記史という枠組みを意識した場

合には、かなづかいを含めて、表記の「揺れ」ということがらについても充分に考える必要があることは言うまでもない。

前述の荒木田守武のかなづかい調査で得た「假名文字遣」との一致率（九八・二％）は、自筆本四種に転写本二種を加えた総体を調査対象としているが、個々の文献に目を配った場合にそうした「傾向」にも異なりがみられることは言うまでもない。本稿では前述の調査の結果を踏まえ、そうしたかなづかいの

「揺れ」の分析を目的の一つとする。具体的には「誹諧之連歌（守武独吟千句）」をとりあげ、そのかなづかいの特徴をより明らかにするために、同じく守武自筆本である正風連歌「秋津洲千句」と対置させつつ考察を行うことにする。

二 調査資料と調査方法について

荒木田守武は伊勢神宮内宮禰宜を世襲した荒木田氏の一門に文明五（一四七三）年に生まれ、天文十八（一五四九）年に没している。「新撰菟玖波集」に入集を果たしており、連歌・和歌作者として活発に活動をしていたことで知られている。この守武の連歌・和歌作品の多くが自筆本として神宮文庫及び神宮徴古館に蔵されているが、本稿では神宮徴古館蔵本「誹諧之連歌」（注2）（内題に拠る。外題は「飛梅千句」であるが、西鶴編に同名の千句が存するのでこれを避けた。）を資料として、かなづかいの「揺れ」という観点から、そこにみられる和語のかなづかいと字音語のかなづかいとを総合的に分析することにする。

本稿で調査対象として採り上げた「誹諧之連歌」は守武を山崎宗鑑とならぶ誹諧の祖として文学史上に名を留めさせた作品として名高い。「誹諧」の「連歌」という内題がよくその内容を表現しているが、守武は跋文中で「所にいひならはせる俗言わたくしひれたる心詞一向はうほつうつ、なき／事のみなれとあまたの中なれハ／うすくこく打ませけり」と述べる。もとよりこれは本書の種々の「誹諧」性を語彙的な側面から述べたにとどまるが、連歌が言語芸術である以上、その語彙的側面が「誹諧」性の大きな要因の一つであることも自明である。いかなる語が守武にとって「俗言」や「わたくしひれたる心詞」であったか、いいかえれば「誹諧」性を支える語彙は何かということもまた興味深い。それを（直感的には捕捉できても）蓋然性をもって提示する為には相応の手続きが求められることもまた明らかで、これは今後の課題としたい。ところで語彙的な視点から本書をみわたした場合、守武作の正風連歌である「秋津洲千句」と比し、明白な異なりを見せるのが字音語の大量の使用である。和歌の道統をふまえた正風連歌においては、ごく少数の、いわば和語にちかく認識されていた語を除いては字音語が使用されることはない。（注3）漢字二字によって表記された字音語を（原則的に）各句に含む「疊字連歌」は、著名な「流俗の色とは見えす梅の花」「珍重すへきものところしれ」の付合が「菟玖波集」の十九雑体連歌「誹諧」の部に入れられ、「実隆公記」長享二（一四八八）年十一月五日の条に「疊字連歌 言捨有興」（注4）とみえるごとく、遊戯的な誹諧の連歌

と捉えられていたことは明らかである。本書ではきわめて多くの字音語が使用されており、そうした事実そのものに「誹諧」性を求めることができよう。文学的見地からも、へ伊勢神宮内宮一編宣の職に昇った守武にとって、俳諧の連歌は、正風の連歌や和歌とは相違して、明らかに「藝」の文学であった（注2 テキスト解説一七頁）ことは明らかである。本稿ではそうしたテキストの性質がここで採り上げるとき、かなづかい、また表記の問題としてどのようにあらわれるかということを考究することを目的としている。

三 かなづかいの分析

まず、「誹諧之連歌」と「秋津洲千句」にみられる、かなづかいの問題とすべきすべての語を整理し、「假名文字遣」と対照した結果をまとめたものが「表一」である。この「表一」から次のようなことが明らかにになる。

- 一 「秋津洲千句」のかなづかいは異なり語数で九八・一％、延べ語数で九九・五％と「假名文字遣」のかなづかいと比べてたかい一致率をみせる。
- 二 一方「誹諧之連歌」のそれは、異なり語数で八四・三％、延べ語数で九二・〇％と、「秋津洲千句」と比して「假名文字遣」のかなづかいとの一致率がひくい。これは六文献全体の異なり語数での一致率九八・二％と比してもひくい数値であり、本書のかなづかいが、全体としてみ

た場合には、「假名文字遣」のかなづかいにちかいと判断し得るものの、その「ちかさ」の度合いにおいて他五文献、就中「秋津洲千句」とは異なることを示している。語頭、語中尾といった、かなの位置に着目した場合、「誹諧之連歌」においては、語頭に「あ」を使用しない、「秋津洲千句」においては語中尾に「い」を、また語頭に「え」を使用しないという傾向をみせている。

ところで「和歌大綱」（注5）に次のような記述がみられることがよく知られている。

- 一 先かなをかくべき様をしるべし
上にかくい 下にかくひ 上にかくわ 下にかくは 上に
かくう 下にかくふ 上にかくお 下にかくを 上に
え 下にかくへ □合にかくゑ □合にかくゐ

また、「ひをいにつかふ事上になし」（「假名遣近道」）（注6）なども「和歌大綱」と同様、位置によるかなの使い分け（注7）への言及と考えられるが、こうしたかなの使い分けが「秋津洲千句」のそれと一致するのである。「和歌大綱」や「假名遣近道」の記述がかなによる和語の表記を意識してのものであり、また、かなを主体とした表記行為の累積の中から生まれたものであることは、想像に難くない。その意味で字音語を一切含まない正風連歌である「秋津洲千句」が、そのかな表

記において、こうした記述と共通した「行き方」をみせることはむしろ当然のことと考えるべきであろう。ただし、『秋津洲千句』といえどもまったくの例外なしに『和歌大綱』の記述に添うものでは勿論ない。「上にかくう 下にかくふ」では語中尾に「う」を使用した「あやうし(危)」二例がみえる。

をしへによるハあや引からすよ(七オ四)

あや引きみちハ過うからまし(二一オ二十)

これは「假名文字遣」(文明十一年本・版本共)にも「あや引し 危」とみえているものであり、稿者がこれまでに行った二つの調査においても共通してみられるかなづかいでもありこの表記は故なしとしない。「上にかくお 下にかくを」「上にかくえ 下にかくへ」は必ずしもかな表記の実勢にそったものではなく得ず、当然の事ながら「を」を語頭に使用した例はみられる。かくのごとき「例外」はみられるものの、『秋津洲千句』のかなづかいは『和歌大綱』の記述する方向と概ね一致することがわかる。次にこの「和歌大綱」の記述をてがかりに「俳諧之連歌」を検討すると、その記述と一致しないのは、かな表記の実勢とあわない例を除くと語中での「い」「わ」「う」の使用、語頭での「ゑ」の使用ということになる。それぞれについて詳しくながめることにする。語中に「い」を使用した和語の例が次のごとくみられる。「いさかい(諍)」(六六八)

(注8)「うたい(謡)」(二五〇)「かい(貝)」(五三二)

「くいつく(食付)」(十・三八三)「くらひ(位)」(追五ノ追五訂正)「ものくるい(物狂)」(一七二)「こい(鯉)」(六六五)「こい(恋)」(四二・六八五)「こい(尤*重)」(七一七)(*は漢字字体において左右の関係をあらわす)「さいはい(幸)」(跋三〇)「しいて(強)」(跋三二)「た、かい(戦)」(五四八)「たひ(鯛)」(二六一)「たらい」(一八七)「ちいさ(し)(小)」(一四〇・二五七・六九九)「はい(灰)」(七七五)「はい(這)」(一三四・七〇九)「ひたい(額)」(一〇一・一六・七三八・八六〇)「ふるい(振)」(三三)「まい(舞)」(八二・四・八六五・追三)「まいる(参)」(二五二・三二二・三二二)「もちい(餅)」(一三九・三八四)「わつらい(煩)」(九〇・九三八)「わらい(笑)」(八五・三八〇・六二)これらは元来語中に「い」を含まない語である。これら以外に「いたいけ(幼)」(一六〇)「おさない(幼)」(一三三)「かうかい(莽)」(一〇五)「さいはい(幸)」(跋三〇)「すい原」(七六一)「やのい(家根)」(七三)(注9)が存する。後者のグループは元来語中に「い」音を含むものであるから、これを「い」表記することに關して理由を求めることは可能ではある。しかし、『秋津洲千句』が語中尾に「い」をまったく使用しないことと比してこれらの使用、特に前者のグループでの使用は目をひく。「ふひへ此三つにかよふ」「はひふへばにかよふ五音の故」「丹抄かなつかひ」という認識はおそらく、当時「和歌・連歌世界」に身をおき文学的な活動を行っていた人々の間には

存したと考えられ、「おくのひをふひへの外に書もありいきをひよはひたくひなるらん」(「仮字遣近道略歌」)なる和歌が成立する以上、「ひ」を「ふひへ」に使用することは自明のことであつたと考えられる。そう考えた時、前者のグループに含まれる、八行四段動詞ならびに上二段動詞連用形の例(全四一例中二十例)の多さは目をひくと同時に、(そうした語の表記にかな「い」を使用した結果、「假名文字遣」との一致率もきわめてひくくなっているのであり)そこに表記上のしまりのなさを感じさせる。

字音語に目を転じると、本書にみえるかな書き字音語の中、字音仮名遣いが漢音形、吳音形ともに「い」形をとるものとして蟹撰開口韻(口・台・斎四・海・探齊・祭三・霽・泰・祭四)があり、漢音形が「い」形をとるものに蟹撰合口韻(皆・灰)、梗撰諸韻(庚三・清・敬・勁)がある。(「表二」参照)これら各例において注目すべきは「い」形をとる例である。これは言うまでもなく「くんによむ字の時下をいとよむをひのかなに書字あまた有」(「丹抄かなづかひ」)が「こゑによむ字」(同)にまで適用されたものと考えられる。勿論、「大略声よむ字の下をいとよめるハはしのいなるへし」(同)なる認識も存したのであろうし、これらの例はどこまでも例外的な存在と考えるべきではあるが、前述の、和語の語中尾に「い」をきわめて多く使用するという事象を考え併せた場合、これらの背後に和語のかなづかいと字音語のかなづかいとの「相互干渉」が存することに気づく。

語中での「わ」の使用も「秋津洲千句」にはみられない。元來語中に「^ワ」音を含む語、いいかえれば古典かなづかいで語中に「わ」を含む語は、「あわ(泡)」「かわく(乾)」「ことわり(理)」「さわかし(騒)」「さわく(騒)」「よわし(弱)」「よわる(弱)」等少なからず存在する。しかしこれらの語が「わ」をもつて表記されることはむしろ稀である。

(今ここでは、字体「ハ」を以て表記されたものをかな「は」に属するものとして述べているが、さらに別な視点から分析を加える必要がある。)稿者のこれまでの調査(拙稿一九八四・一九八五・一九九〇・一九九二)に拠ればこれらの語は鎌倉期資料を含め、むしろ「は」で表記されてきたことが明らかである。これは「和歌大綱」の「下にかくは」と一致している。ところで「誹諧之連歌」は少数ながら語中に「わ」を使用している。「誹諧之連歌」以外の荒木田守武五資料で語中尾に「わ」が使用された例は以下のとおりである。Aに「たくな材(栲縄)」(一三ウ八)「ねぬな材」二例(五一オ抹消/五一オ訂正)「み材(三輪)」二例(五七オ三・六九オ六)、Eに「すそ材(裾廻)」(一八オ三・三一八)、Fに「なに材(難波)」(十三ウ八)とある。これらには元來語中尾に「^ワ」音を含んでいる「すそわ」「みわ」が含まれており、また「なにわ」も掛詞としての使用であり、そう考えた場合、やはり「誹諧之連歌」の語中尾における「わ」の使用はやや気になるところである。(ただしここに挙げた語の大部分が「くなわ」であることさらに考える必要がある。)「誹諧之連歌」での「わ」使

用は次の例である。

二見のうらをかへるくちな材 (一九八)

秋かせに誰たのしくもなるこな材 (三六五)

ひゆるなどくもてかくな材かけとめよ (五四九)

字音語に目を転じれば語中尾において「ゝフ」形をとる、いわゆる合拗音が少なからず存在する。(「表二」参照)これらは「くわひしもいらす物おもふ暮」(六六)の例を除いてすべて「わ」ではなく「は」(ただし「ハ」で表記されている。

「ハ」字体の当期における使用に関しては別稿を予定しているが、そうした実態からは「ハ」字体の所屬を單純に「は」とは考えにくいことも事実である。しかし、ここではとりあえず「ハ」「は」と考えることにすると、「誹諧之連歌」のなかぶかいや和語、字音語ともに大勢としては語中尾に「は」を用し「わ」を使用しないという「傾向」にあることがわかる。

この場合、数量的にみれば字音語のなかぶかいや和語のなかぶかいの干渉をうけたと見なしうるのであるが、そもそも合拗音形の語が少なからず存在すること自体が和語のなかぶかいに微妙な影響を与えたとも考えられるのである。語中尾での「秋津洲千句」の「う」使用についてはすでに述べたが、Fに同じく「あや引し(危)」(一八七・三)が一例みられる以外、守武が語中尾に「う」を使用するのは「誹諧之連歌」においてのみである。次の各語が該当例である。「いた引(甚)」(三八五)

「を引な(姫)」(一九二)「か引かひ(筭)」(四三九)
「か引ふり(冠)」(六五七)「から引と(唐櫃)」(七四四)
「くら引(暗)」(八九八)「こ引ち(小路)」(三四三)
「ほ引(頬)」(七六六・八六〇・九九六・追四二)「ま引くる」(八六九)「むなし引」(四六九)「や引く」(七〇)

これらの語は古典かなづかいで「う」を以て表記する語が大部分であり、「頬」以外)そうした観点からのみこの事象を捉えれば問題とはならない。しかし、位置によるかなの使用に着目した場合やはり注意すべきことがあろう。また「いたう」「くらう」「むなしう」等のウ音便形は、和歌・連歌世界での使用が稀であることが予想され、その意味で「かなづかい」が問題にされる語の埒外にあったと考えられる。そうした語については表音的なかなづかいがあらわれる可能性もあり、また一方に語中尾に「ゝウ」形があらわれる大量の字音語を含む「誹諧之連歌」におけるかくのごとき状況はむしろ当然といえよう。字音語において「ゝう」形で表記されている語は多数故、挙例を省くが、逆に次のごとく「ゝふ」形がみえる。

木ほふをや今日の弓矢につくすらん(鋒・九九五)

また、これと関連していえば字音仮名遣いでは「ゝフ」形となる唇内入声字(舌韻尾字)を「ゝう」形で表記した例も存在するのである。これらは(当該文献にのみ見られる現象では勿論ないが)和語のなかぶかいの影響というべき例である。

しいてなをさんもし引しんいか、也（執心・跋三三）
へいしをハ野へのこて引につ、ませて（胡蝶・二七一）
かすみのうちにこ引ハ入りけり（劫・五四二）
たきの糸ふんか引のをまたえゝに（文匣・一九）
ふくの神ひんほ引神につれられて（貧乏・九二九）
いつかほ引しのかひ出まし（法師・八六八）
山吹のさけハせんほ引はしまりて（儼法・五〇九）

「ふ」表記は次の一例のみ。

紙一てふにあふき一ほん（帖・八二二）

以上「秋津洲千句」と「誹諧之連歌」を対置させつつ「誹諧之連歌」のかなづかいの「行き方」を和語のかなづかいと字音語のそれとの「相互干渉」という観点から分析した。

四 おわりに

荒木田守武の六文献のかなづかい調査を行って得た結果は、

- 一 守武のかなづかいは「假名文字遣」のかなづかいときわめてよく一致している。
- 二 かなづかいの「揺れ」はごく少なく、全体として統一的なかなづかいが行われている。

という二つのことがらに集約されるが、調査中「誹諧之連歌」が他文献と異なる傾向を有していることに気がついた。そして同じく荒木田守武のかなづかいの「揺れ」についての分析を進めているうちに「秋津洲千句」がその「揺れ」に關与しない、つまりかなづかいにおいてきわめて安定的な文献であることが明らかになった。本稿は何故に「誹諧之連歌」がそのかなづかいにおいて他の文献と異なる「傾向」を有しているのか、ということについて、「秋津洲千句」と対置することによって稿者なりの解答を提示したものである。それは次のようにまとめられよう。

- 一 「秋津洲千句」が「和歌大綱」に示されたような、和語を中心としたかなの使用の「行き方」と軌を一にするのに対して、「誹諧之連歌」のかなづかいはそれとの一致をみない点が存する。
 - 二 「誹諧之連歌」でそうした「傾向」は具体的には「誹諧之連歌」が大量の字音語を含んでいることと結びつくと考えられる。
 - 三 さらに「誹諧之連歌」のかなづかいを和語と字音語という観点にたちながら総合的に捉えた場合に、そこにはかなづかいの「相互干渉」とでも呼ぶべき現象がみられる。
- 二はさらに次のように考えるべきであろう。「誹諧之連歌」

が大量の字音語を含んでいるということが、實際的に和語のかなり「揺れ」を生じさせたことは充分考え得ることがある。しかし、ことはそうしたいわば「実際の」な問題に留まるのではない。そもそも「誹諧之連歌」が「誹諧」の連歌であるというところに、因を求めざるべきであると考え。すなわち冒頭に述べたとき「所にいひならハせる俗言わたくしひれたる心詞」を使用し、そして式目からも解き放たれた(注10)「誹諧之連歌」においては、すでに「秋津洲千句」に求められているとき「新式をよく覚えてかなつかひ勿論」(「當風連歌秘事」)という正風連歌の埒から自らはなれたと見なすべきであろう。その意味で文学的に「正風」に対する「藝」であった「誹諧之連歌」は、またかなづかい・表記においても同様に捉えるべき存在なのである。とはいえ、「誹諧之連歌」のみせる「傾向」の他文献との異なりとは「假名文字遣」の支える「世界」の内部における、きわめて微妙なものであるのだが、まさしく「文字の占める位置が文献の質に関わって反映する」(安田章一九七二)例として、また「文字に主体の態度の一面が反映する」(同)一つのケースとして挙げ得るものと考ええる。ある言語事象における統一的な「傾向」と例外的な「揺れ」とは決して対極に位置するものではなく、二つを相即的に解釈することによってその言語事象がより明らかになると考えられる。

注1 国語学会平成五年春季大会(於京都女子大学)において口頭発表。調査対象資料は、A法条千首(大永二 一五

二二年) B世中百首(大永五 一五二五年) C誹諧之連歌(守武独吟千句) (天文九 一五四〇年) D秋津洲千句(天文十五 一五四六年) E宗祇第一句集「萱草」(守武手写本) F伊庭千句(守武手写本) 「荒木田守武のかなづかい——自筆本を中心資料として——」(早稲田大学「国文学研究」第一一二集 一九九四・三)

2 テキストとして「神宮古典影印叢刊 荒木田守武集」(一九八三・五 八木書店刊)を使用した。翻刻本文として「荒木田守武集」(一九五一・二 神宮司序刊)、「守武千句注」(一九七七・八 飯田正一編 古川書房刊)が存するが、それぞれに稿者と判読を異にする箇所が存しており、そうした箇所については稿者の判断に従っている。

3 拙稿「大山祇神社法条連歌の字音語」(一九八六年十二月「松蔭女子短期大学紀要」二号)

4 引用は群書類従刊行会刊「実隆公記」に拠る。

5 引用は風間書房刊「日本歌学大系」第四巻に拠る。

6 故山田孝雄蔵本に拠る。此本は一オ・七ウまでが「仮字遠近道」、八オ・十六オ五までが「丹抄かなつかひ」、十六オ六・二十オまでが「仮字遠近道略歌」、二十ウ・二十一ウに「追加」とある。

7 こうした「和歌大綱」の記述は最終的には「仮名字遣」(安田章 一九六七・一九七一・一九七二・一九七三・一九九二)または「かな文字遣」(迫野虔徳 一九七

四)といった「異体がなのレベルにおける用字法」(伊坂淳一 一九八八 ab)を含めて位置づけるべきものであるが、ここでは「かなづかい」に限定して考えておく。

8 所在は千句については一々千、追加五十韻については追一々追五十の句番号で示した。

9 此箇所、注二既掲「守武千句注」は「やのへ」とするが、草稿本の字形から判断して「い」と判読すべきである。「やのい」は「やのえ」の母音交替形と考えられる。

10 本連歌では月花の句が通常の千句よりも少ないなど「式目には極めて自由な立場で臨んだ」(「守武千句注」解説三百頁)ことが窺われる。

参考文献

伊坂淳一 一九八八 a 藤原俊成の用字法・試論(I)

(「学苑」)

b 藤原俊成の用字法・試論(II)

(「学苑」)

今野真二 一九八四 連歌書のかなづかい(「国語学」一三

九集)

一九八五 大山祇神社法楽連歌のかなづかい(早

稲田大学「国文学研究」八六集)

一九九〇 「閑居友」のかなづかい——和語につ

いて——(早稲田大学「国文学研究」

百集)

一九九二 「たまきはる」のかなづかい——和語について——(辻村敏樹教授古稀記念「日本語史の諸問題」明治書院刊 所収)

迫野虔徳 一九七四 定家の「仮名もじ遣」(「語文研究」三七)

安田 章 一九六七 仮名資料序(「論究日本文学」二九)

一九七一 仮名文字遣序(「国語国文」四〇—二)

一九七二 仮名資料(「国語国文」四一—三)

一九七三 吉利支丹仮名遣(「国語国文」四二—九)

一九九二 濁る仮名(「国語学」一七〇集)

附記 本稿は第百六回近代語研究会(一九九三、七、二四 於國學院大學)において口頭発表したものの一部をまとめたものである。研究会において御教示いただいた方々に深謝申し上げる次第である。